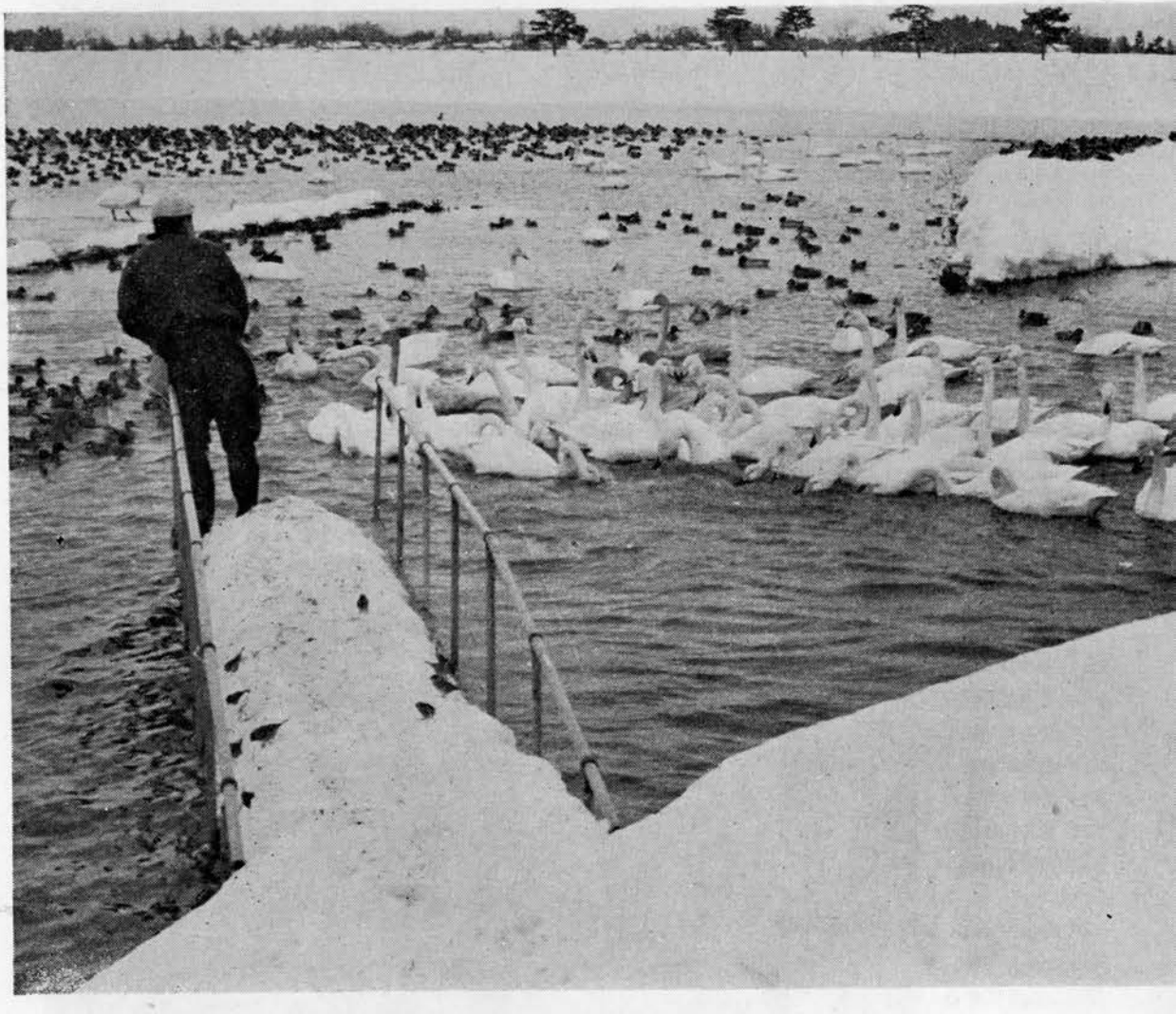
毎月1回25日発行　　第3種郵便物認可(昭和35年7月26日)　①

山と博物館

オオハクチョウ特集　第6巻第3号増刊号　　1961年3月20日



新潟県瓢湖のオオハクチヨウ

遠くに見えるオオハクチョウは　本年はじめて飛来したもので　人に充分にはなれていない。
エサを与えている人物は故吉川氏の長男。　　1961.1.22　信大学生　佐野昌男氏撮影

大　町　山　岳　博　物　館

北アのふもとに白鳥の湖を生みだそう

羽田　健三

大白鳥の渡ってくる処

大白鳥は旧北区の極地及び北部のツンドラ地帯や湿原で巣引して、2羽の雛を育て、厳しい冬になると南下する。旧北区というのは欧州及びアジアのうち、印度南部印度支那、南支那及び琉球以南などの東洋区を除いた地域である。したがって欧亜にまたがるロシアでは最も広く蕃植しているので、古くからロシア人になじみ深く、バレー「白鳥の湖」なども創られ、大白鳥は鳥類のなかまの中で最も気高く、情愛のこまかな鳥として、世界中の人に親しまれている。

瘤白鳥は嘴の基部に黒い瘤があり、旧北区のうち欧州に分布している。そこでは古くから家禽化されているものが多い。したがってお濠や動物園に飼われているのは欧州から輸入された家禽であり、やはり何といっても大白鳥が一番気品がある。

日本にみられる大白鳥はすべて冬鳥として渡ってくるもので、その渡りの経路は2通りある。一つはシベリアからカムチャッカ、樺太をへて日本列島にそって南下するものであり、越冬地の南限は奥羽地方の北部で陸奥湾を中心にしている。しかしながら、それ以南の本州でも中部地方までは年によって少数が稀に迷って飛んでくるもう一つはシベリヤから満州、朝鮮を経て、山陰地方や九州に渡る経路があるが、大部分は朝鮮半島内に越冬する。

ところで人類による自然の破壊作用は近来とくにひどくなっているので、蕃植地と越冬地をとわず、大白鳥のすまいは急激に減少している。したがって日本では最近は本来の南限地を越えて更に南下し越冬できる水面をさがす白鳥が増しており、保護される湖沼には重点的に毎年越冬するようになってきた。新潟県下の瓢湖や島根県下の宍道湖はその著しい例である。両地ではともに天然記念物に指定され、住民が一致して保護にあたり、瓢湖では更に餌も与えている。

白鳥や鴨の食べもの

木崎湖を白鳥の湖にするには水面及び湖畔を銃猟禁止区域にしなければならない。ところで冬期を中心として木崎湖に常に棲んでいる種類は、マガモ、カルガモ、コガモ、オシドリ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ホホジロガモ、カイツブリの8種であり、ヒシクイトモエガモ、カワアイサ、アカエリカイツブリが稀にやってくる。常棲する鴨の中、マガモ、カルガモ、コガモオシドリ、などの陸鴨は禁猟にすると激増することが予想されるが、そのばあい問題になるのは先ず漁業に対する鴨の害作用である。しろうとの人は鴨はすべて魚やシジミを食べるといっているが、それはあやまりである。私が多くの個体を剖検して鴨類の食べものを調べた結果は次のようである。

先づ魚類を食する割合は、カワアイサが90%、ウミアイサ100%、マガモ2.4%、カルガモ0.4%、カイツブリ9%などで、他の鴨類は一際魚類を食べていない。木崎湖にはアイサ類は上述のように稀にくるだけで、保護しても増える鴨ではないから、アイサによる害はない。その他のマガモ、カルガモやカイツブリは、湖畔の浅底に冬期じっとしているヨシノボリ（イサザというもの）を

東京上野動物園不忍水禽分園、エサ台にガチヨウと野生のオシドリ　1959.12.16羽田健三撮影

稗にみつけて食べているが、量も例も少なく、しかもヨシノボリは漁業の対象になる魚ではない。

次に貝類を食べる鴨については、マガモ1%カルガモ4%、ホシハジロ1%キンクロハジロ51%、スズガモ19%、ホホジロガモ0.03%となるが、いづれもカワニナ類（こじき貝というもの）やタニシ類などの巻貝類のみで、シジミなどの二枚貝は一際とっていない。これは潜水して水底の生物をとるばあいに、シジミ類は砂中に体を入れているので、みつけることができないが、水底にバクロして住んでいる巻貝類は、拾うことができるによっている。したがって、漁業上の魚と貝に対する鴨の害作用は、木崎湖では考えなくてよいのである。

島根県宍道湖のオオハクチヨウ、禁猟区になつて数年目、ここでは餌は与えていないが湖岸近くで水中の食物をさがしている所　1960.1.21　羽田健三撮影

次に農業に対する害作用はどうであろうか。上述の陸鴨といわれるマガモ、カルガモ、コガモ、オシドリは、主として夜間に陸上に出動して植物質をとる。その中で最も多食しているのは、湿地性のタデ類やイネ科類などいわゆる雑草の種子であり、つぎに、籾やソバの実を食べている。

ところで、冬鳥の鴨類が本格的に渡ってくるのは、10月下旬からであるが、その時には既に籾やソバはとり入れられている。したがって、鴨類が冬期食している籾やソバの実は落ち穂であり、夜間に湖外に出動して拾ったものである。ただカルガモは留鳥であるため稲作にあたえる害が多少あるが、銃猟禁止をしてもしなくても、存在するところの害作用である。

このように、銃猟禁止にして鴨が多く集ってきても、農漁業に与える害作用は全くないといってよい。かえって水上に落される糞が、湖の営養を高めてくれるだけである。それは鶏糞の肥料としての価値に思い及べば、お分りのことである。

仁科三湖を自然水鳥園にしよう

今、木崎湖に遊んでいる白鳥は、三月中旬には北の国に帰るだろうが、彼女が来年の冬に友だちを沢山連れてくるようにするには、湖畔に鉄砲の音をとどろかせてはならない。すなわち、仁科三湖一帯を銃猟禁止区域にすることが、絶体に必要な条件になる。そのばあい、ちょっと考えると、ハンターが直接困ることになるようだがそうではない。保護を始めた瓢湖の例では、数ケ月の中に鴨が数十倍に増えているが、その割合から推すと、保護された三湖には、数年後には数万の鴨がみられるだろう。保護して蹌集するそれらの鴨はすべて陸鴨であるが彼等は陸鴨である以上はその習性より、湖中に餌をとらずに夜間大挙して出動し、松本平一円の水田や小川に餌を求めることになる。そこで松本平では、今でも一部で行なわれている夜射ち猟を、数十倍に増すことができるしたがって大町地区でも、昭電の南や常盤の水田に、適当に夜射ち場所を増設するならば、夜射ちの獲物も一夜に百羽は下るまい。更に湖畔に住むハンターには、協同して湖の附近に鴨場を造ることを進めたい。鴨場では、普通一日に百羽平均は捕れているので、夜射の獲物と合せて、新設温泉の観光客の食膳をにぎわすことができるまた更に両者の猟を名物として宣伝すれば、そのための外来のハンターも在市することになるので、結局一石数鳥ということになる。

ここで本論に立ちもどろう。既に保護している湖沼の白

鳥や鴨は、写真にみるように人を恐れずに近より、人の手から直接食べ物をもらうので、保護することにしたばあいに三湖に集まる、白鳥、オシドリ、その他の鴨の数万の大群は観光船を追いかけたり、湖畔の人影にアヒルのように寄るので、ここに冬期の水上の楽園が誕生する。こうなると、北アの自然水禽園を楽しむだけにやってくる観光客も莫大であろうし、たとえ新温泉に湯あみするだけの観光客であっても、それによって充分に楽しい日をすごすことができよう。ここに郷土の人々が上のような鴨類の保護と利用の構想をとりあげることを切に期待するものである。

栃木県下丹波鴨場（個人経営）に蝟集したマガモとコガモ、1日に50～100羽の猟が成立している1959.12.20羽田健三撮影

大町山博の立場

「山博は儲からないから廃止しろ」という声のあることを、間接的に聞いている。たとえそれが少数意見であっても、おろそかにはできない。阿部氏が前々号で指摘したように、山博自身のP・Rが足りないことに、一因があるからだ。山博が儲からないことは、儲かるようにも、しなくてはならないと云うことであって、それが、直ちに廃止論に繋がるべきものではあるまい。何故ならば、逆説的には、教育施設が、一般産業と同じく、儲けるためにあるということになるかどうかだ。

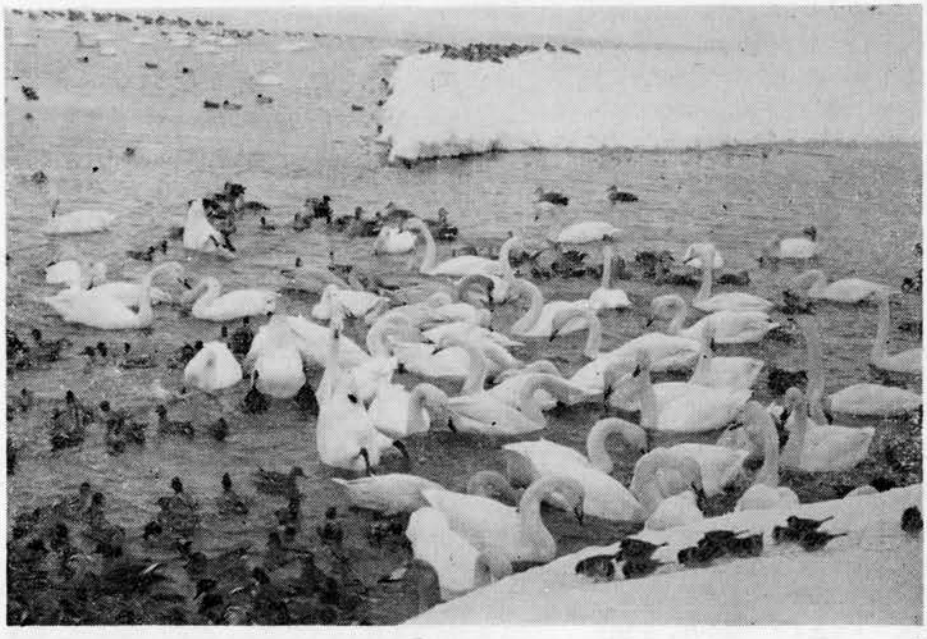
しかしながら、何とかして儲かるようにも、したいということは、市民の中では、われわれが最も早くから最も痛切に気に病んできた所である。そして、いくたびかの論議の末に決定をみて、創設以来10年に亘って進めてきている山博の立場がある。当分は眼にみえた収入はなくても止むをえない。山博は、やはり設立趣旨を忠実に守り抜き、山岳を中心とした学術研究と社会教育を大胆に実践しつづけて、一日も早く郷土を巨大な観光都市にするということである。その時には、山博の維持費などには眼もくれないだろうし、山博自身も、自ら求めずして収支がつぐなうようにもなろう。北アの自然を資源とした観光産業は、観光資源を探りだしそれを高め且つ守ることが必要であり、それはそのまま山博の仕事であるから、山博は観光事業と表裏一体的な関係にある。国立公園地帯でありながら、黒部ルートの観光開発の主導権を市がにぎることの出来た最大の原因は、自然園を構想した市立としての山博を、市が矢面に立てたことによると云っても過言ではないし、国や県は、大町市が社会教育の立場をとり入れつつ、健康的な観光事業を進める優れた着想にあるからこそ、諸手を挙げて賛意を表し、多大の協力と援助をおしまない。山博はこのような形で市の千載一隅の発展期に役立ったのが嬉しい。また当初のもくろみに大きな自信をもてたことが嬉ばしい。

ところで、山博はもう次の仕事に移って多忙を極めている。針ノ木岳に雷鳥、カモシカ、サルを増殖して、自然園の価値を高める仕事、上述したような白鳥のみずうみを生みだす運動、扇沢集団地区に造られる山の道場を運営する多数の指導員を今から郷土に養成しておく仕事また更に犬窪の新温泉の北側には少くとも一万人は収容できるスキー場を開設せねばならないが、その広大なスキー場を夏期には牧場として開発するための牧草の研究もある。また更に、莫大な観光客を対象とする自然物を資源とする郷土みやげの指導もある。その他、国や県を相手に、公表をはばかるきわめて重要な仕事にも当っている。これらの山博の当面している仕事をみると、みな大町が大観光都市に発展する日に備えての仕事ばかりで、学術的にも、教育的にも新境地を行くものであり、その一つ一つが難事業である。けれども、それらはやればできる仕事ばかりで、山博は必ずなしとげよう。山博はこのように愛する郷土の物心二面の大発展のために、積極的に真剣に町造りの基礎的な重要な仕事を着々と進めている。ただそれは現在も将来も金として山博に直接かえってこないというだけである。ここに山博の大きな矛盾と悲しみがある。しかし、社会教育の立場にあるからには、山博にかえらなくても、またすぐ眼にみえなくても、将来の郷土一円に大きな利益がもたらされればよいのだ。そのためにこそ山博は誕生しているのだ。どうか市民各位には、山博自体が知っている悲しみと矛盾のみを近視眼的にとり上げることなく、山岳観光都市に欠くことのできない山博を十分に御理解下さり関係者一同をあたたかいまなざしでみてほしいと思う。

1961.3.13 （信大助教授 山博嘱託）

木崎湖に来た1羽の大白鳥

千葉　彬司



瓢湖のオオハクチヨウ、鴨は小さい方がコガモ、大きい方はカルガモ　1961,1,22　佐野昌男撮影

オオハクチョウ来る

1月も中ば過ぎた23日の朝、事務室の寒気をふるわせて電話のベルが鳴りひびいた。

〝木崎湖にハクチョウが来ている〟職員一同はその知らせに色めきたった。オオハクチョウが大町を訪れたのは実に12年ぶりであったからである。

早速海ノ口の西沢氏（大町市役所観光課）郷津勝市氏（海ノ口区長）興水太仲氏（大町市平小学校の先生）の3氏に問い合せ再確認をする。間違いない！現地に急行する組と保護呼びかけの組がとび出して行った。同日12時には北部有線放送を通じてオオハクチョウの保護が呼びかけられ、翌日は更に北安地方事務所狩猟係のハンターに保護を要請する声がスピーカーを流れていた。急行組が現地（海ノ口地籍）について、青黒く寒々とした湖面に浮ぶ白点をみつけるのにさして時間はかからなかった。ふるえる手に双眼鏡を持ち、白いひとつの点に焦点を合わせる。〝オオハクチョウだ！〟しかも一羽だけ、他は首を深々と背の羽の中に入れて眠っている小さなカモの群がみえた。

密猟の声

「3貫匁くれえ、あったずらいネ」「そうせあのくれえでっかけりや、そのくれえはあったずらいネ」23日の朝大糸線海ノ口駅の待合室ではそんな声が聞かれたという。

オオハクチョウが撃たれて1羽だけになったという風評が部落の中に拡まっていたのである。いつ来たのか、もし撃たれたとすれば誰が撃ったのか、ぜんぜん見当がつかなかった。それから部落まわりがはじまった。

――1月22日に4羽来て1羽撃たれて、他の2羽は南の方に飛び去って、1羽だけが今のこっているのだ――

――昨日（22日）の午后鉄砲の音を聞いた（少年）――

――21日の午后より来ていた。――

――20日の朝から来ている。その朝は霧が深く午前9時頃晴れたので見たら、1羽だけ泳いでいた――

――最初、中綱湖におりて、中綱で1羽撃たれ、残りの1羽が木崎湖に逃げて来た。――

と情報はまちまちであったが、20日の日にはじめて見たという人が1番多く、20日に飛来したことがほぼ確実になって来た。

平林氏怒る

「おれがハクチョウを撃ったっていう、評判だが、おれがとったのは、ハクチョウじゃねえ、博物館の連中が来て良く見てハクチョウじゃねえってことを証明してくれるまで、肉にもしねえで、とっとく（とっておく）からみてもらいてえ」と云う電話が24日あった。電話の主は、海ノ口平林作興氏で、さっそく行って見ると、2、3貫匁もあるのが、他のカモと仲良くぶらさがっていたオオハクチョウとは似ても似つかぬ茶カツ色のヒシクイ（ガンの仲間）。「変な電話が、じっとかかって来て困る。ハクチョウをいじめるのはお前ずら、なんて、俺だってハクチョウは禁鳥位は知っている。罰金が、オッカネーでね。それに鉄砲かついで行っただけでも部落の衆が、あいつハクチョウを撃ちに行くなんて云うし。カモをねらっても、ハクチョウの廻りにみんな寄っちまって

鉄砲を向けることもできねえ。」それからヒシクイを捕ったときの状況を話してくれた。ヒシクイは21日に4羽飛来1羽撃って、弾が当ったことは確実だが飛び立ってしまい、暗くなってわからなくなってしまった。翌日朝、稲尾地籍で飛べずにいるのを1発で仕とめたとのことで部落の人が4羽来たというのも、案外ヒシクイと間違えているのではないかと思われるふしもある。その後ヒシクイは大町市平小学校へ教材用標本として寄贈したとのことであった、数日して某氏は「駐在さんが、俺の所えオオハクチョウを捕りやしねえかって廻って来たから、今迄集めて標本にしたのを全部見てもらった、そしてオオハクチョウを捕ったのを取り締るもいいが、俺の所に来ているこの鳥を見てくれ、撃っても良いのは2、3点であとはみんな撃っていけねえのばかりだ、こう云うのはどうなってるだね、といったらあいまいな返事をして帰ってしまった」と話してくれた。

エサをまく

海ノ口丸山留吉駅長(現ヤナ場駅長)は仕事の関係から朝6時前から出勤するので、オオハクチョウの早朝の行動を観察していてくれた。1番近寄る地点はほぼ決って海ノ口のハス畑の付近で午后5時頃から明朝6時頃までであった。初日の23日にコヌカとヒエがまかれ、その日からエサをまく仕事がはじめられた。海ノ口宮島豊三郎氏の好意により、いかだ式エサ台が寄付された。180㌢×180㌢の台は図の地点に固定されて、連日エサをのせて浮かんでいた。

又信大助教授羽田健三先生の指導を仰いで海ノ口の上部農具川の入口に寄せるために、そこからの「モミガラまき」も行なわれた。

エサに付く

2月9日 「そうか、ついに食ったか」電話を聞いている学芸員の声が一段と大きくなった。海ノ口郷津忠昭公民館長からの電話であった。午前6時エサを食べているのを海ノ口前駅長丸山留吉氏が確認したものだった。

あれから18日間、1時は舞う姿を全然みてないので散弾でもあびて負傷しているのではないかと心配していたのが、エサ台の上をせんかいしている姿も確認できわれわれをほっとさせた。

瓢湖のオオハクチョウ

新潟県の瓢湖のオオハクチョが写真の様にカモの群と混ってエサを食べている姿は実にほほえましいものであるが、これまでになるには、街の人たちにも、オオハクチョウにとっても忘れられない人がいる。その人は、故吉川重三郎氏である。「一番先の一羽が、突然餌に寄って来た時、来たか、来たか、俺は田地田畑みんな売っても、お前に餌を買ってやるぞと、心の中で叫んだ。残された、たったひとつの望みは、自分の手のひらから、じかに白鳥たちに食べさせることだ」と吉川氏はは三上士郎

保護すると、コガモや、カルガモまでなれてたくさん集まつて来る、瓢湖にて 1961.1.22 佐野昌男撮影

氏との話しの中で語っている。しかし自分の手のひらから、じかに食べさせることを唯一の望みとしながら昭和34年12月25日64才でこの世を去って行った。吉川老人の昏睡状態の12月25日北方から8羽のオオハクチョウが飛来し、老の家の附近を一周して飛びさり、翌日の茶ビに付された午后2時再び8羽のオオハクチョウが通過して行ったとのことである。年内に飛来したのはその時がはじめてであり、遇然の一致としても、何んとも不思議なことであると今でも語り草になっている。

保護打合せ行われる

このオオハクチョウの問題を真けんに考えようと〃ハクチョウ保護打合せ会〃が2月20日大町市公民館で開かれた。三沢教育長、曽根原社会教育係長、種山平支館長西沢海ノ口公民館主事、仲谷地方事務所狩猟係長、田中友の会代表、武井協議会委員、長沢修介調査員、柴田公民館職員が出席して行なわれた。基本方針として、現在のオオハクチョウを完全に餌づけること、木崎湖全水域を禁猟区にするよう運動を進めて行くなどが決められた

少年グループ生れる

「おじさん、どうして鉄砲なんかうつだい、カモなんかうちゃ可愛そうじゃねえかい」「うるせえガキどもだ、あっち、行ってろ」「へええ、おじさんのうつのなんかあたるもんか」「やかましい、てめたちがさわぐもんでみんなむこうに行っちまったじゃねえか」鴨をねらっていた猟師と、学校帰りの3、4人の子供たちがこんないいあいをしているのを、知ってか知らずか鴨は湖心へと遠ざかって行った。海ノ口少年グループが結成されたのは今年の1月、グループ員は小、中学生100余名で構成され、オオハクチョウ保護、ハス畑の保護——自然保護に重点が置かれている。海ノ口公民館長の郷津忠昭氏は〃海ノ口地区も、もっと自然保護に力を入れて、できることなら〃白鳥の湖〃いや水鳥の楽園にして行きたい。それとともに部落も繁栄して行くと思うから……」と語っていた。この少年グループの子供たちのためにも、熱心な部落の人達のためにも、自然を愛する、すべての人々のためにも、来年もオオハクチョウが木崎湖を訪れることを祈ってやまない、なぜなら、この1羽のオオハクチョウが、自然保護推進の1歩をしるしたのだから。

（山博学芸員補）

木崎湖の大白鳥

興水太仲

今年は珍らしく寒い冬でした。幾年振りかで、木崎湖が結氷しました。朝に夕に氷の上でのワカサギの穴釣りは、北国の冬を想わせる景観でした。四囲の白銀の山々銀板と云う氷原、それと対比して真青な水の湖、何と云う表現にしょうかと迷う木崎湖の冬だった。

それにも増して美しい神の使、オオハクチョウが来たこれは、かっては普通であった景観が、乱狩のため抹殺され、今日に到ったが、今年はどうしてか、珍らしい寒波と白鳥の到来で、木崎湖周辺は多くの話題を生んだ。

時ならぬ珍客に湖の端は云う迄もなく、市当局、山岳博物館、各新聞社、驚きとあわただしさの中に保護の手をさしのべた。而しそこには、悲しい現実があった。それは、

○北アルプス山岳国立公園の境界外
○禁猟区外
○従ってカモ猟は公然と認可

等々であった。

而し幸に〃オオハクチョウ〃一羽は辛じて助かった。そして博物館の意も、だんだんに湖水を取巻く人々に通じた。そして今、一羽の白鳥が、人工飼に取りつく迄になった。

野鳥の保護を叫ぶ今日、せめても、この事は大きな、成果であった。そしてこれは、次代を負う、湖水を取巻く児童の胸にも下記の記録の様に伝わって行った。

木崎湖の繁栄は、それを取巻く人々の幸である。たった一羽の白鳥が、やがて来る春に去って、再び渡来する期にはその美しい姿が点々と、湖面を彩る事を念じつつ……。

（平小学校教諭）

ハクチョウ

柴原広子

「はるかぶりに、木崎湖に白鳥が来たものだ。」「残

念だが一羽では……」などと近所の人や、私のうちの人が云います。

私は、ずっと前のことは知りませんが本当に珍らしいことだと思います。そして私も一羽だけで残念だと思います。

今白鳥は木崎湖で遊んでいる大勢のカモたちと昼間も夜も遊んでいます。そうしてどんな雨の中でも、北風のビュービュウ吹く雪の日でも、沈んでしまいそうにあれくるう波の高い寒い日でも、本当に楽しそうにしています。これは、あたえてくれるえさのためだろうと思います。そして、今日まで生きて来たのも、楽しそうに遊んでいるのも、このためだろうと思います。

始めは「あの白鳥は、きっと、飛べないんだぞ」と云った人もありました、だけど私が、朝顔を洗いに出たり学校に来る途中で湖水ばたで見る時、湖の上をとんでいるのをよく見掛けますので、きっと元気だろうと思います。羽を大きく広げ、湖の上をとび、私たちの村の上をとぶ姿は、何と云ったらいいかわかりません、その美しさ、青くすんだ空の中を、まっ白い羽を、ゆうゆうと動かして、気持よさそうに、鳥の女王様ででもあるかのようにとんで、ふわりっと湖におりた時、私の心はスーッとするようです。

一週間ばかり前の時のことでした、私が学校の帰りに湖水ばたの道を家に帰って行った時ですが、はじめは、べんてん様の所に遊んでいるのを見ました、しばらく友達とそこで白鳥を見ていました。そして家に帰りましたが、十分ほどたって後を見たら、さっきべんてん様のところにいた白鳥が、とんで来ました。「来た来た」と私たちは、大よろこびで手を上げました、白鳥は私たちの頭の上をとんで、私たちをぬかして、ずっと向うの水面におりました、私たちの頭の上で、私たちに何か云ったように思いました。

木崎湖で、今人気を呼んでいる、この白鳥が、冬も夏も、ずっと長くここにいて、もっとたくさんの友達が集まって来たら、きっと白鳥の湖になるだろうと思います

私の家は、白鳥のいる湖水ばたです、これからも、こんな湖になるようにしたいと思っています。

（平小学校　五年）

オオハクチョウ

西沢三江

○「私たちの住んでいる木崎湖に珍しい白鳥が来ましたたね。」

○「オオハクチョウです。」

○「湖水のカモを、りようしさんたちがうちます。」

○「もう少し気をつけて、うたなければ、いいのにね。」

○「そうしたら、白鳥も、きっと、もっとたくさんの友だちを連れて来るだろうにね。」

○「どうしてりようしさんはカモをうつのだろうか？」

○「白鳥はおどろくだろうにね。」

○「そうだと思うね。きっと。」

○「私たちの〃海ノ口〃では、少年少女クラブをつくって、『みんなで白鳥をかわいがりましょう』って云っているのにね。」

○「私たちは、ぼくも、私も、白鳥をかわいがっているのにね。」

○「もっとみんなで、親切にして、〃白鳥の湖〃にしたいね。」

これは、この間私たちが学校の帰り道で話しながら行った時のことです。　（平小学校五年）

木崎湖のオオハクチョウ

郷津里津子

今、私たちの木崎湖には美しい白鳥が来ています。

町ではみなが「白鳥をかわいがりましょう」とそうだんして、いろいろやっています。とくに山岳博物館の平林先生や、千葉先生は、その係りなので、私たちが白鳥をかわいがるように、その方法を熱心に教えたり、お話ししたりしてくださいます。

私たちも、私たちの一人一人が、この方法やお話のように、白鳥の事について、めんどうをみてせわをしてやったり、親切にしてやったら、石をなげたり、いじめたり、追ったり、おどかしたりすることはないと思います

私の考えはこうです。

今ここにいるたった一羽の白鳥が、こどもを産んでくれて、いっそう白鳥がたくさん、木崎湖に浮かんでもらいたいことです。新潟県や、ほのぞか、よその県の湖のように、たくさんの白鳥が、私たちの木崎湖にも、毎年毎年来てもらいたいことです。そして木崎湖がバレーの「白鳥の湖」のようになればいいがなあーと思います。

平林先生のお話しでは、「白鳥は大変に人なつこく、また木崎湖のような、こんな山の中の湖まで来るのは大変に珍らしいこと」だそうです。考えてみると、遠い遠いシベリヤから長い旅をして、こんな山の中まで来てくれた白鳥ですもの、私たちは、大人の人も子供も、みんなで一つ心になって、白鳥のことを考えてやって、白鳥のよろこぶようなことを、たくさんやってあげたらと思っています。

私はこんなことを考えています。私の考えが空想でないように、これからは本当に一つ一つでいいから実現してみたいと思っています。　（平小学校五年）

山と博物館　第6巻第3号　1961年3月20日発行
発行所　長野県大町市TEL（大町）211
大町山岳博物館
印刷所　大町市上中町
信州印刷大町工場